

■幼稚園双六の解説

本双六は、明治 25 年（1892）の制作された「幼稚園双六」であり、幼稚園というもの世に知らしめる役割を果たしていた。

文科省 HP によれば、開設の経緯が以下のように書かれている。

<幼稚小学と幼稚園の開設>

明治五年に制定された「学制」には、小学校の種類として「幼稚小学」をあげ、「幼稚小学ハ男女ノ子弟六歳迄ノモノ小学ニ入ル前ノ端緒ヲ教ルナリ」（第二十二章）と定めている。しかしこの幼稚小学は実現をみなかった。（以下略）

<東京女子師範学校附属幼稚園>

文部省がはじめて幼稚園開設の伺いを太政官に提出したのは明治八年七月七日であるが、この伺いは許可されず、同年八月二十五日再び伺いを提出して九月十三日にはじめて開設が許可され、文部省は九月十五日東京女子師範学校に附属幼稚園の開設許可を布達した。それは東京女子師範学校が開設されてまもない時であった。東京女子師範学校では翌九年六月、保育の方法および建築設計について定め、同年十一月六日に園舎が竣（しゅん）工した。そこで文部省は同月十四日幼稚園開設について布達し、同月十六日開園式が行なわれた。なお翌十年十一月二十七日には皇后宮および皇太后宮の行啓があり、幼稚園開業式が盛大に挙行された。附属幼稚園では関信三を監事とし、ドイツ人クララ・チーテルマン（松野クララを首席保母、豊田英雄らを保母としてフレーベルの幼稚園を模範とする幼稚園保育を開始したのである。開園当初の附属幼稚園では、園児は上流階級の子女が大部分を占めていた。

この双六では、明治中期の上流階級の家庭の子女と幼稚園入学に至るまでの模範的な暮らしぶりを描いている。つまり、乳母日傘（おんぼひがさ）で育った子女しか、幼稚園に入園できなかったのである。

因みに、文科省の「明治 6 年以降教育累年統計」によれば、明治 25 年度の全国の幼稚園の概要は以下の通りである。幼稚園教育の普及は未だしの感が強い。

幼稚園数・・・177校

保母数・・・357人

幼児数・・・12011人（男6531人・女5480人）

28マスで構成される子供の躰けや遊びからは、子供天国の様子が伺われる。

エドワード・S・モースの『その日・2』、イザベラ・バードの『日本奥地紀行』、ラザフォード・オールコックの『大君の都』で書かれているように。。。

振出しは、「父母の慈愛」。以下の文が添えられている。

・父母の慈愛

両親は子供を集めて 教育に要用の咄（はな）しをして聞かせてある
長男は父の肩をもみながら 聞いてある

振出しから、一ていてい、二だっこ、三ひるね、四あんよ、五おじぎ、六はいはい・・・と、サイコロの出目に従って進む飛廻る双六だ（双六の構成は3頁参照）。

両親・祖父母、兄弟、乳母、下女、先生の愛に生まれつつ、コマは進んでいく。上りは、幼稚園の先生迎えられ、楽し遊ぶ様子が描かれている。

幾つかマスの添え文を以下に挙げてみた。

・どれまでまで

どれまでまでとって あとよりおうは あぶなし
こもりをするものは しじゅうきをつく
こどもけが せぬようすべ

・おんぶしよう

おんぶして おんもへ ゆこうよう
いまに おしと（尿）をしまつしてから つれていってあげるから
おとなしくしておいでよ

・兄弟なかよし

にいちゃん おさるを見てゆこう
あのおさる 食べものをほしがって
いろいろの藝をするのであります

・おしえのはなし

おじいさんがおはなしをするから よく聞きなさい
ようございます
おじいさん どうぞ おはなしをしてください
おちいさいくすのきの（※）おはなしを きかせてください
※楠木正成のことと思われる

・けいれい

先生 どちらへ いらっしゃいます
めうへのひと 又はみしる人に ゆき合いたるときは
けいれいをすべし（故人言以 若尊長行合 時敬礼可成）

なお、版元の山崎 暁三郎（やまざき ぎょうざぶろう）1864 年（元治元年） - 没年不詳）は、明治時代から大正時代にかけての東京の地本問屋で、号は寒英である。

■ 幼稚園双六の構成

上り 幼稚園		学校へ行く	けいれい
		あさおき	まごの貞
おんぶしよう	さかやき	なき子	ちからもち
兄弟なかよし	ころんだ	ばあやのおもり	おしえのはなし
だっこ	おじぎ	ちょちょち	おむまはいしはいし
ていてい	ここまでおいで	どれまでまで	たかいたかい
たっち	そえ乳（そえぢ）	はいはい	振出し 父母の慈愛
おとなしい	あんよ	ひるね	